

先進校に学ぶキャリア教育の実践

CASE 1

もりおかだいさんこうこう

岩手・県立 盛岡第三高校

受験対策重視の詰め込み型から
自ら学び・考え・発信する力の育成へ

取材・文／藤崎雅子



≫実践ノウハウ

- 総合学習にディベートを導入
- ゴールと条件を示し、生徒の自主的な活動を促す
- 総合学習の効果を生かし、授業でも思考や表現を促進

岩手県有数の進学校である盛岡第三高校が、受験対策偏重が生む諸問題に対応すべく、3年前から学校改革に取り組んでいる。宿題や課外授業をスリム化するなど、知・徳・体のバランスを重視した様々な見直しが行われた。その象徴的な取り組みが、総合的な学習の時間の充実だ。教科・科目の授業とともに同校教育の重要な柱と位置づけ、ディベートを取り入れたプログラムを「Dプラン」と名付けて1・2学年対象に展開。授業改革との相乗効果により、生徒の思考力や表現力の育成に取り組んでいる。

ディベートを活用した
総合学習のプログラム

ある教員は生徒達を、地域の言葉で「しよすがり(恥ずかしがり)」と表現する。物事を読み取る力は持っているのに、自ら発信する力が弱いのだという。同校が目指すのは、そんな生徒達に対して、単に知識を詰め込むのではなく、社会が変化しても主体的に物事を判断し、課題解決していくような、生きる力の育成だ。そのために総合学習Dプランでは、自ら学び、考え、発信する力を鍛えるディベートを取り入れている。

昨年度は、2学年の最後にディベートを設定。そこで有意義なディベートができることを最終地点とし、2年間のプログラムが構成された(図1)。各学年の1年間で3つのタームに分割し、段階に応じたテーマに取り組む。各タームは、テーマ

について調べて発表するというのが基本的な流れだが、主張の明確化や意見交換などディベートの要素も取り入れ、内容は少しずつレベルアップしていく。

1学年第1タームは全員が「裁判員制度」をテーマに、賛否を明らかにして論文を作成した。第2タームはグループごとに時事問題や自然科学をテーマに設定し、調べたことを発表。第3タームは個人でテーマ設定し、パワーポイントを使ったプレゼンテーションに挑戦した。2学年は大学の学部・学科研究や、修学旅行の自主研修(グループ行動)を絡めたグループ研究を経て、第3タームにディベートに取り組む。

Dプランの名称は「ディベート」のDからつけられたが、中身はディスカバー、ディスカッション、ダイナミック：様々な意味に広がっている。現在は生徒に「自分のDを見つけてほしい」と投げかけているという。

図1 Dプランの流れ(2009年度)

学年	ターム	取り組み
1学年	第1ターム	テーマ「裁判員制度」について意見交換会
	第2ターム	グループ発表(グループごとにテーマ設定)
	第3ターム	プレゼンテーション(個人でテーマ設定)
2学年	第1ターム	大学の学部・学科研究
	第2ターム	修学旅行の事前・事後研究
	第3ターム	ディベート

>> School Data

普通科 / 1963年創立
 生徒数 / 960人(男子492人・女子468人)
 進路状況(2009年度実績) / 大学 85.1%・短大 0.6%・
 専門学校 0.3%・就職 0.9%・進学準備13.1%
 岩手県盛岡市高松4-17-16
 TEL 019-661-1735
 URL http://www2.iwate-ed.jp/mo3-h/

Process
 立ち上げのプロセス

未履修問題をきつかけに
 新たな進学校の姿を模索

2006年秋、全国の高校に波紋を広げた必修科目未履修問題をきつかけとして、同校は学校改革をスタートさせた。ただし、それ以前から改革の芽はあったと、経営企画課主任の鈴木徹先生は話す。

「当時、膨大な課題を与えて詰め込むような教育方法により、高い進学実績を上げていました。しかし、生徒たちの表情は暗く、やらされ感と疲弊感が見てとれ、受験指導への偏りに問題意識を持つ教員は少なくなかったのです。そんな中で未履修問題があり、学校全体で議論する機会を得ることができました」

改革は、あいさつや清掃など人間教育の基本の見直しから、課題や課外授業、外部模試の精選まで多岐にわたった。特に総合学習の充実が改革の核に据えられ、プロジェクトチームを結成して検討。その内容は、前校長の井上節夫先生の発案でディベートを取り入れることになったが、当時プロジェクトメンバーだった経営企画課の寒河江佳緒理先生は「大変なことになったと暗然たる気持ち」だったそう。

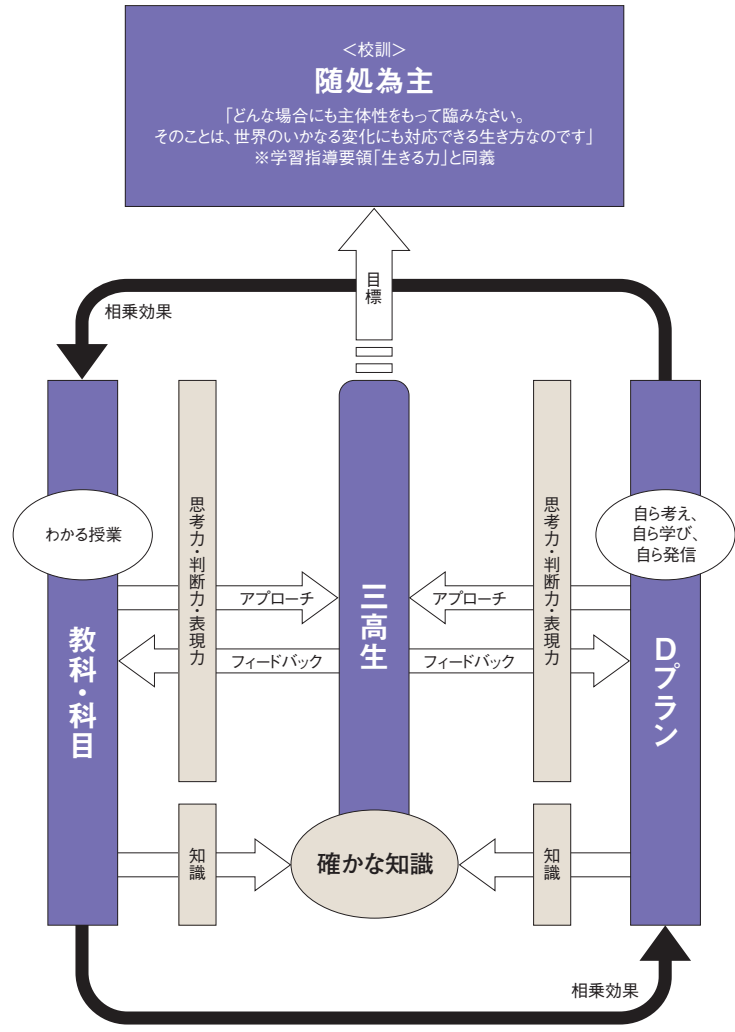
「前任校の国語表現の授業でディベートを扱ったことがあったのですが、人前で話すのを嫌

がって泣く生徒が出るなど、思うように生徒を動かすことができませんでした。手間がかかるわりに成果が見えにくい。そんな苦手意識があったのです」

どうしたら効果的に実践できるのか、総合学習やディベート実践の先進校を視察。専門家のアドバイスや他校教師の協力を得て、08年度からのDプランスタート直前によく大まかな計画ができたという。開始後も、校外の高校生対象ディベート講習会に参加して学ぶなど、進行と並行して内容が練られた。

現在、同校教育におけるDプランの概念が図

図2 盛岡第三高校Dプランの概念図



式化されているが(図2)、この形ができたのは改革手から2年経った09年春のことだ。前副校長の高松博明先生が「目の前の課題に対して試行錯誤を続けてきた結果、足跡を見たらこうなっていた」と言うように、きれいな図を描くことよりも実践ありきで改革が推進されてきたのだ。また、こうしたDプランの実践の履歴は、学校のホームページに掲載されている。

「自分達も他校から学んできました。その恩返しの意味も込めて、ほかの学校での取り組みに生かしてもらえよう、なるべく詳細に掲載していきます」(鈴木先生)



経営企画課
高橋史顕先生



経営企画課
寒河江佳緒理先生



経営企画課主任
鈴木 徹先生



前副校長
高松博明先生

図3 「プレゼンテーション」の個人テーマの例

- 食料自給率
- エコポイント
- 少子化問題
- CO₂排出量の削減と産業界
- 高速道路無料化
- 平泉の世界遺産登録
- 生徒・児童の理科離れ
- 高校の義務教育化
- 医師不足
- 消費税の増税
- 成人年齢の引き下げ
- 日本の国際貢献
- など

(1学年第3ターム)

「プレゼンテーション」は話し手から聞き手へ方向のコミュニケーションですが、ディベートは双方のやりとりです。話し手は、いかに相手を納得させるかを必死に考えて話します。一方の聞き手の役割も重要で、相手の話をよく聞き、それにどう反論すべきか考えます。そうした誠意をもったやりとりの中で、自分達の意見のいいところも悪いところも見えてくるでしょう。現実の社会で求められるコミュニケーションに近いと思います」

「1つの論題について、肯定・否定の2つの立場に分かれて議論するディベート。プレゼンテーションに力を入れる学校は少なくないが、総合学習Dプランにディベートを取り入れる理由について、寒河江先生はこう語る。

「ディベートで双方向性のコミュニケーションを学ぶ」

Close up ① 総合的な学習の時間

図4 Dプランの展開 (2009年度)

学年	月	テーマとねらい	主な内容
1学年	4月	仲間づくり	新入生合宿と絡めてガイダンス、エンカウンターなど
	5月	図書館ガイダンス	ガイダンス、本を借りる
			ガイダンス、ファーストインプレッション(議題に対する最初の印象をまとめる)
	6月	第1ターム:「裁判員制度」を考える	情報収集、立論作成
	7月	▽賛否を明らかにして意見を述べる	グループごとに意見交換会
	8月	▽相手に伝える手法を考える	文化祭での展示構想 他クラスの展示から学ぶ
	9月	第2ターム:グループ発表	テーマ設定、ファーストインプレッション
			情報収集、立論作成、グループ意見交換
	10月	▽時事問題に対する理解を深める ▽相手に伝える手法を考える	他グループとの意見交換会
	11月	第3ターム:プレゼンテーション	クラス発表会
	12月		テーマ設定、ファーストインプレッション 情報収集、立論作成
	1月		グループ発表、意見交換、中間発表会
	2学年	2月	▽パワーポイントを使って、わかりやすく考えを伝える
3月			学年発表会
4月		第1ターム:学部・学科研究	各大学の特色や学部の研究内容等を詳しく知る
5月			進みたい学部について情報収集・グループワーク
6月			大学入試について情報収集 社会について情報収集・グループワーク
7月			志望理由について記述・発表
8月		第2ターム:修学旅行の事前・事後研究	旅行先の地域や史跡について調べてプレゼンテーション
9月			旅行時の自主研修(グループ別行動)のテーマ設定
10月			情報収集・資料づくり
11月			プレゼンテーション
12月	第3ターム:ディベート	旅行後、学んだことなどをプレゼンテーション	
1月		ガイダンス、教師による模擬ディベート	
2月		立論の作成	
		立論の交換・反駁と質疑の作成	
		模擬試合、他クラスとの試合、Dプラン発表会	

と、生徒達はだんだん議論を楽しむようになってきたという。「今までその場がなかっただけで、生徒は発信したがついている」と鈴木先生は考える。また、Dプランで重視されているのは、ディベーター



2学年第3タームのディベートでは、飼育した鶏を自ら食べる「いのちの授業」の是非などを議論



1学年第3タームでは、教科「情報」と連携してパワーポイントの資料を作成し、プレゼンテーションを行った

トの型やテクニックではなく、調べたり考えたりするプロセスだ。様々なテーマについて調べ、意見を交換する中で、学問や社会への興味関心を育むねらいもある。

「3年前、生徒にアンケートをして驚いたのが、進路学習を頑張りたいという生徒が9割を超えたのに対して、学問に興味があるという生徒は3割にも満たなかったこと。ほとんどが大学進学希望者ですが、せっかく苦労して大学に入学しても、目的を見失って中退しないか心配になりました。大学の学部・学科研究も大事ですが、その前に『こんなことを知りたい、学びたい』という興味をもっともたせたいと思っています」(寒河江先生)

ねらいどおり生徒の知的好奇心が育ってきていると感じる場面について、経営企画課の高橋史顕先生が教えてくれた。

「時事問題を話題に出しても、生徒がぐいぐいとくるようになりました。新聞はスポーツ欄以外もおもしろいことがわかったという生徒がいたり、ニュースを見ながら家庭での会話が弾むようになったという声も聞かれます」

生徒の主体性を促す

引き算の指導

Dプランの実践にあたって、どのような工夫がなされているだろうか。そのポイントの1つは、生徒の主体性を引き出すために教師が手をかけ過ぎないことだという。Dプランの全体プラン

ニングを担当するのは、08年に新設された経営企画課(図5)で、実際に授業を行うのは各クラス担任だ。どのクラスも足並みをそろえて実践できるように、同課が進行の台本、タイムスケジュール、想定問答などの資料を用意し、毎週、授業前の打ち合わせを行っている。これを同課の寒河江先生は「教師が指導しないための打ち合わせ」と呼ぶ。

「動いてほしいのは、教師ではなく生徒。そのために、様々な状況を予測して準備は万端にしておきますが、実際の指導場面では、引き算が必要だと思えます。先生方には、できるだけ後ろに引いて、困るまで助けしないでくださいとお願いしています」

ただし、単に生徒の自由にさせるのではなく、「最初にゴールを示すこと」と「そこに向かうための条件を提示すること」が大切だという。例えば、2学年第2タームの京都・奈良方面への修学旅行で行われる自主研修。グループごとにプランを立てて行動するが、「実施後にわかりやすく報告する」というゴールと「体験を取り入れる」という条件が示された。生徒はグループでよく話し合い、禅寺での座禅体験や焼き物制作など、それぞれ工夫して充実した時間を過ごしたようだ。

「何でも自由だと結局何も決められず、ありきたりのものになりがちです。しかし条件があると、その枠組みの中で精いっぱいのことをしようと深く考え、個性が発揮されるようです」(寒河江先生)

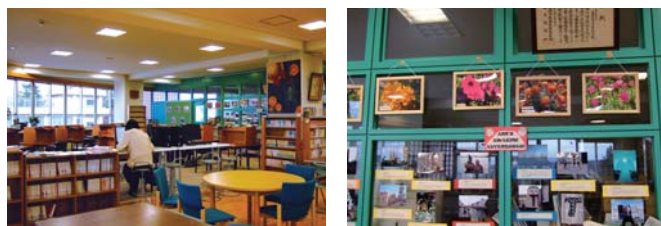
REPORT

1学年第1ターム「裁判员制度」の意見交換 終了後のアンケートより

- 最初は裁判员制度をあまり知らず、今と意見が逆だった。少しずつ知識が入るにつれ、様々な疑問が浮かび、自分の意見を持つことができた。
- 人それぞれ、いろいろな考え方、見方があるということを知った。これは、Dプランだけに限ることではなく、日常生活でも大切なことだと思います。
- 意見を発表するときは、相手を納得させられるくらい、しっかりした根拠を持たなくてはならないし、そのためには広い知識が必要だということがわかった。
- 自分の文章に対して他クラスの生徒が書いてくれたコメントで、自分の考えに共感を持ってくれた人もいたが、自分の考えをすごく批判され、まったく反対の意見の人もいた。批判されて「ああ、そうなのか」と納得できる意見もあったけど、「その考えは譲れない」と思う意見もあった。そういう人の論文を読んでみたいと思った。

2学年第3ターム「ディベート」終了後の 感想文より

- グループで話し合ったり、同じテーマの内容を実際に行った学校のレポートや生徒の作文、それに対する一般の人の意見をインターネットで見たり、クラスの人や他のクラスの生徒と試合をするなかで、自分の考えが深まった。(中略)中学校の時にディベートをやったことがあり、その時は「相手をとにかくやっつけよう」としか思っていなかったが、審判に自分たちの主張を相手よりも強く伝えられるかが重要なのだとわかった。
- 人に聞いてもらうので聞こえるように話すのは当然だし、態度や口調もスピーチの際は重要だと思った。(中略)テストマッチではぼろ負けだったので、他のチームの様子を見て、いいところを取り入れるように工夫した。論題が重い内容だったが、その分、真剣に考えられたし、自分の考えも深まった。自問自答しながら自分の意見を確立していくので、より自分の考えに自信をつけられた。



図書館は土日も利用可能で、勉強や調べものをする生徒の姿がある。また、「表現の場」として、生徒の作品や教職員の活動報告などがたくさん掲示されている

図5 経営企画課の概要(09年度)

【メンバー】
8人
【主な役割と担当人数】
○学校経営に参画し、改革全般を担う
○地域・中学との連携
○教員研修の企画・推進
○Dプランのプランニング・推進
○図書館の充実および運営
○渉外・広報

図書館や進路指導との連携で内容を充実

もう一つのポイントは、Dプランの実践に幅広い分掌や教科を関連させている点だろう。その代表例が、図書館との連携だ。現代社会の動きを取り上げるDプランでは、情報収集が重視されている。図書館は、思考の場、そして生徒や教職員の「表現の場」と位置づけられ、リファレンスコーナー設置など、Dプランの充実とともに図書館の変革も進められてきた。今では何か調べ物が必要になると、生徒から自然に「図書館に行ってきたいですか」という声があがるという。

また、1学年第3タームのプレゼンテーションでは、パワーポイントの資料作成の部分で教科「情報」と連動している。進路指導との接続を意識し、2学年は第1タームで大学の学部・学科を素

材として研究したり、多くのレポート作成の経験を3学年の小論文指導に結び付けたりしている。Dプラン以外にも改革全般を担う経営企画課が主導することで、Dプランを軸に学校全体の連携を進めやすくしているようだ。

Close up ② 授業との相乗効果

授業でもアウトプットや教え合いが上手に

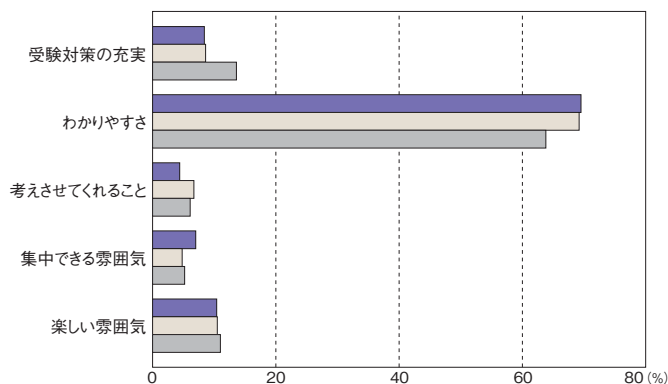
次に、Dプランとともに同校教育の柱となっている、教科・科目の授業に着目してみたい。改革の一環で取り組んでいるのは、「方向の詰め込み型から、生徒自身を考えさせる授業への転換だ。効果的な実践方法は広く共有しようと、校内外に対して授業を公開。教師は日常にお互いの授業を見学し、良い方法を取り入れようとする動きがある。例えば、以前から地歴・公民で生徒同士が「教え合う」授業を実践している鈴木先生の授業には、多くの教員が刺激を受けるといふ。

「物事は受け取るだけでなく、咀嚼して発信することで自分のものになります。生徒同士の教え合いを取り入れ、単に耳で聞くだけでなく五感をフルに使って理解させるよう努めています(鈴木先生)」
 このような思考や表現を促す授業は、グループでの話し合いや発表の機会が多いDプランに取り組むようになって、以前よりやりやすくなっているようだ。「授業中にグループワークをさせると助け

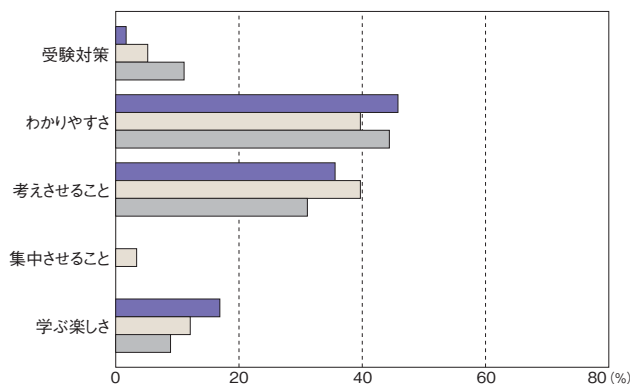
図6 学校満足度調査結果より

■ 09年度 □ 08年度 ▨ 07年度

【1学年生徒】授業に要望したいことは何ですか※最も要望する項目をグラフ化



【教師】授業をするうえでどのようなところに留意していますか※最も留意する項目をグラフ化



合いながら進めるのが上手になった」「授業中の発言で順序立ててわかりやすく話せるようになった」といった話が、教師から次々と出てくる。こうしたDプランの授業への影響に気づいた寒河江先生は、1学年の最初にディベートを実践できないものかと考えているという。

「2学年最後のディベートの際、生徒たちは神経を集中させて話を聞き、メモをとっていました。それを見て、3年間こうした姿勢で授業を受けてくれたら生徒はものすごく伸びると思ったのです。ハードルは高くなりますが、なるべく早い段階でディベートを行い、そこで培われる態度を授業に生かせるよう、方法を探っていきたいと思っています」

また、最近は生徒同士の間関係にも変化が見られるという。1学年対象の学校満足度調査で「友人関係がよくなったと思う」との回答結果を見ると、07年度は57%だったのが09年度は69%に大きく上昇した。また、仲の良い友人を問うと、個人名ではなく「クラス全員」「部活のみんな」と書く人が増えている。

「二斉の詰め込み授業では教師から生徒への一方通行でしたが、Dプランと教科・科目の両面で多方向のやりとりが増えたことが影響しているのではないのでしょうか（鈴木先生）」

Dプランの取り組みが授業をはじめとする学校生活全体に良い影響を与え、またそれがDプランの充実にもつながる。そんな循環ができていくように感じられる。

改革を始めた頃、教員の中には「進学実績が出ているのだから現状維持でいいのではないか」と、路線変更に対して反対する声も少なからずあったという。それが2年間の実践を経て、「Dプランも必要」というムードになってきた。授業での留意点について聞いた教員アンケートでも、「受験対策」は

年々減少し、「わかりやすさ」や「考えさせること」などが上昇(図6)。改革方針の着実な浸透がうかがえる。

ここ数年間の進路実績を見ると、国公立大学の合格率は70%前後となっている。しかし、生徒の進路選択を個別に見ると、難関大学にチャレンジする生徒が大幅に増加した。地元志向が強い地域だが、身近なところで妥協するのではなく、

やりたいことのために全国に目を向けて果敢にチャレンジしようとする気運が高まっているという。

教員の意識が変わってきたのは、こうした生徒の変化を目の当たりにしているからかもしれない。鈴木先生は胸をはってこう話す。

「学校の雰囲気明るくなりました。廊下を歩いている生徒、誰でもいいので話しかけてみれば、その明るさが感じられるはずですよ」

Dプランを立ち上げる際、当時の副校長が呼びかけていた「Dプランで、生徒が変わり、教員が変わり、学校が変わるんだ」。それが今、現実になりつつある。「これからもどんどん変わっていきま」と鈴木先生。新しい進学校の姿を求め、改革は現在も進行中だ。

INTERVIEW

Dプランを通じて物事を多面的に見るように



2学年 高橋花果さん(左)
高橋 健さん(右)

——1学年Dプラン最後の「プレゼンテーション」はどう取り組みましたか
花果さん「私は高校授業料無償化について調べて発表しました。ほかの人の発表を聞いて、単純に海外と比較して政策を考えることへの疑問が自分の考えと共通しているな、と発見できたことが興味深かったです」
健さん「僕は食糧自給率について、もし牛乳の輸入をゼロにしたらどうかとか、今の自給率で日本全国民が生活するためにはなど、いろいろな角度から調べました。発表では単に作ったものを読み上げるのではなく、相手をどう話に引きこむかを考えたのですが、当日は笑いもとれてよかったです」
——1年間Dプランに取り組んで、自分の考え方や行動に変わったことはありますか
花果さん「中学の時は自分の考えをそのまま言えばよかったのですが、高校に入ってからは賛成か反対かを求められるので、はっきりとした意見がもてるよう意識しています」
健さん「テレビのニュース番組などの方見方が変わりました。コメンテーターの発言を聞いていると、きれいな面ばかり言うことがあるけれど、そんなにいいことばかりなのかな、悪い面もあるんじゃないかな、と考えながら見るようになりました」
——今後、Dプランでやってみたいことはありますか
健さん「県や市の問題をディベートなどで取り上げて、その中で出た案を県や市に提案するようなことが、僕らにもできるんじゃないかなと思っています」
花果さん「私も、考えを述べるだけでなく、実際の行動につなげていけるようなことができればいいと思います」